

熱帯の不思議な植物 ウツボカズラ

写真のお兄さんが嬉しそうに抱えているもの、なんだかおわかりでしょうか？これはネペンテス・ラジャ (*Nepenthes rajah*) という、ウツボカズラの1種の捕虫囊 (ほちゅうのう) です。大きいでしょう！この捕虫囊の中にはなんと1リットルもの水が入るそうです。

ウツボカズラといえば、食虫植物 (しょくちゅうしょくぶつ) として有名ですが、どうやって餌をつかまえているのでしょうか？その仕組みをご説明しましょう。まず袋の入り



口の周りやフタの内面にある沢山の蜜腺 (みつせん) から蜜を分泌し、ハエやカ、アリなどの餌となる動物をおびきよせ、それらが捕虫囊のなかへ入っていくと、ロウ質で覆われたつるつるの内壁に足を滑らせて消化液の中にまっさかさま、というわけです。落っこちた動物がなんとか這い上がろうとしても、捕虫囊の内壁はつるつるしているので不可能です。餌になるのはアリが断トツに多いですが、チョウやバッタ、時にはカタツムリやトカゲ、カエルなども餌になっているようです。写真のネペンテス・ラジャの捕虫囊の中には、ネズミが入っていたという報告もあります。

捕虫囊はまた同時に多くの生き物の住みかにもなっています。捕虫囊に落っこちてきた生き物を餌にするものもいますし (カニグモの仲間)、捕虫囊の中に住んでいる他の生き物を食べるもの (力の仲間) もいます。外敵から身を守る目的で捕虫囊に住み着いているものもいます (力の仲間)。ちなみに、このウツボカズラを特徴づけている捕虫囊は、葉が変化したものです。

ウツボカズラの仲間は主として東南アジアの熱帯地域に広く分布し、約70種が知られています。そのうち、ネペンテス・ラジャの分布するボルネオ島には約30種が知られていますが、ラジャはキナバル山 (マレーシア国サバ州) のごく限られた地域にのみ生育しています。

ここではネペンテス・ラジャを紹介しましたが、ボルネオ島にはそれ以外にもラフレシア、テングザル、オランウータン、モーレンカンプオオカブトなど、世界的に類を見ないほど数多くの、また世界でここにしかない生き物が生育しています。難しい言葉をつかうと、生物多様性が高いのです。しかしながら、急速な開発活動とともにこれらの貴重な生き物が生息している環境が失われつつあります。このような事態を憂慮 (ゆうりょ) し、国際協力事業機構 (JICA) とサバ大学および13のサバ州政府関係機関が協力して、ボルネオ島の生物多様性保全のためのプロジェクトが進行中です。このうちサバ大学は、ボルネオ島の生物に関するレファレンスセンターを目指し、博物館としての機能を拡充させる計画です。ひとはくは以前からサバ大学と学術交流協定を結んでいた縁があり、毎年複数の研究員がサバ大学に派遣され、資料収集を共同で行うとともに、よりよい展示の作成方法など博物館機能の強化についてのアドバイスをしています。

(自然・環境評価研究部 高野温子)